

講座名（専門科目名）	分子生物遺伝学	教授氏名	片山 泰一
学生への指導方針	大学院生の指導は、研究室配属の際にしっかり相談して将来のことについても柔軟に要望を聞きながら研究テーマを決め、スタッフと一緒に研究を進めていきます。週1回の進捗ミーティング、学会発表などを通して、学位論文に向けたステップを確認しながら進めます。最終的には、幅広い知識とリサーチマインドを持つ医師および研究者・社会人として必要となる資質（倫理感・論理性・コミュニケーション能力・根気強さ・データ読解能力・研究デザイン力）を涵養し、さらに可能であれば海外学術交流なども行いグローバルな視点も持ち合わせた人材を育てることを目標にしています。		
学生に対する要望	実験に興味があり、意欲のある人を求めています。また、基礎研究だけでなく、こころの問題の解明（支援技法、診断技法等も含む）にも興味がある方、一つのことに黙々と取り組むことが好きな方、歓迎します。		
問合せ先	(Tel) 3313 (Email) katayama@ugscd.osaka-u.ac.jp	担当者	片山 泰一
その他出願にあたっての注意事項等	出願される際に当講座をお考えの方は事前にお問い合わせください。		

【研究室紹介】

近年、神経発達症（発達障がい）や、子どものこころの障がいが増加していることが指摘されています。自閉スペクトラム症（ASD）・注意欠如多動症（ADHD）・限局性学習症（LD）などの神経発達症（発達障がい）は、増加の一途を辿っていると言われていたのですが、社会の認知が上がった結果、今までは、診断名が付かなかったものに名前を付けただけであるという意見もあります。しかしながら、生物学的に増加している証拠と社会環境の変化に加えて、社会の認知が進み、これら3つの要因が重なって、増えていると考えられています。加えて、摂食障害、虐待、パーソナリティ障害などはもちろん、最近では子どものうつ病、統合失調症など大人あるいは思春期以降に発症すると言われてきた病気病気が、小学校の低学年にも及んできており、その割合の増加だけでなく、より多様化し複雑になってきていると言われていています。

このような状況の中、私たちには、「こころ」という概念、特に発達期にある「子どものこころ」を基礎生物学的見地からどのように捉え、解明していくかという課題が求められています。一方で一つの方法や物の見方では、決して解決にはつながらないことも事実です。これまで「子どものこころ」と直接関わらないと思われるような基礎生物学的な因子の研究が思わぬところで脳の発達に関わることや、神経変性疾患に関与する分子が、精神疾患の発症にも関与していることが分かるなど、これまでもいくつも多様な視点から行った研究が成果につながる例を見てきました。

そんな訳で当講座では、「こころ」すなわち「脳」に関する様々な機構を様々な角度から個々が考え、研究する・・・そんな研究室ですので、脳に興味があって一緒に研究を楽しみたいと思っている人は、是非、一度、当講座を覗いてみてください。

【研究テーマ】

- (1) 自閉スペクトラム症（ASD）の早期気づき、診断、原因解明に関する研究
- (2) 軸索に特異的な細胞骨格に着目した神経・精神疾患発症機構の解明
- (3) 精神疾患の分子メカニズムの解明を目指した研究
- (4) 細胞内分解系と神経発達に着目した研究
- (5) 蛋白質の翻訳後修飾に着目した神経・精神疾患発症機構の解明

【研究室ホームページ】

<https://www.ugscd-osaka-u.ne.jp/mbs/>